

# 小児科病棟における遊びについて

— 白血病患者を中心として —

発表者 田 伏 住 江

堀 美代子・上 條 サトミ・市 川 みちえ・高 野 泰 江  
岩 坂 聖 子・石 井 正 子・小 沢 由美子・丸 山 智津子  
渡 辺 富士子・山 崎 真 理・前 田 智富美・小 幡 礼 子  
上 村 益 子・市 田 こず枝・久 保 美 潮

## はじめに

当科における入院患児は、白血病が大半を占めている。検査、治療のため、入院生活が長いこと、又再発のため入退院を繰り返し、退院後も1～2週毎の外来通院を余儀なくされる。患児、家族に与える精神的負担は大きい。そんな中で、病気が病気だからと甘やかされ、何でも思い通りわがままに過ごす患児、反抗的態度にでる患児、無気力にグダグダと一日を過ごす患児、初回入院で集団生活にとけ込めず孤立している患児の姿がみられた。子供にとって、生活の大部分を占める遊びを通して、入院生活のストレスを少なくし、集団生活の規律、協力や、年少児へのいたわりの気持ちを持てるよう援助し、病棟を楽しい場所にしたいと考えた。そこで、看護の一環としての遊びを見直し、年中行事、プレイタイムなど、実施してきた事を検討してみた。

## 方法及び実施、結果

### I プレイタイムについて

場所：主として3階ホール、病室

時：毎週土曜日 14時30分～15時30分

昭和54年5月より、患児とスタッフとの交流の場、集団遊びの場として、毎週土曜日の午後にプレイタイムを設け、その日の勤務者が参加して行った。最初のうちは、月に1～2回程度しか実施されなかった。その理由として

- ① プレイタイムの責任者が決まっておらず、当日勤務の看護婦が担当したため、時間があつたら行う程度のものであった。
- ② 患児中心のプレイタイムでなかったため、次第に患児の意識がうすれてしまい、プレイタイムを知らない患児も増えてきた。

そこで①に対して、カンファレンスを開き月毎に当番制をとるようにした。その結果、看護婦間においても、プレイタイムに対する意識が高まり、責任を持って実施されるようになった。

②に対して、患児中心のものとするために患児の希望をきいたり、話し合いをしてみた。始めの希望は、映画、劇などという受身的なものが多かったが、回を重ねることにより、トランプ大会、散歩などのように、自主的にやろうというものになった。例をあげると、トランプ大会では、年長児が中心となって、日時を連絡したり、進行を行った。結果的には年長児からは、もっとむずかしいものをやりたいとか、つまらなかったという声がかかれた。また年少児にはむずかしく、途中であきてしまうということもあった。

話し合いは、患児が司会をして行った。一例として、看護婦側からお誕生日会をプレイタイムの時間にやったらどうかとの提案に対して、「お誕生日会はやってもやらなくてもいい」「看護婦さんがやってくれるならやってもいい」など、消極的意見のためまとまりのないものとなった。

## II 年中行事について

- ① 入院生活中でも、家庭・学校で行っている行事を体験させたい。
- ② 親子で一緒に参加してもらうことなどにより、家庭的な雰囲気を味わえるようにする。
- ③ 患児同志の交流を深め、集団生活における規律、協調性を養う。
- ④ 治療面以外で、患児と看護婦、医師との交流の場とし、信頼関係を築く。

以上の点を念頭において年中行事について再検討し、月に1回の割合で実施してきた。内容、場所、参加者については表Iに示す通りである。なお、今回の研究では54年10月～55年5月までの年中行事について表わしてある。この中で昨年新たに企画したのとしてピクニックがある。患児達は、前日より着て行く服やお弁当を入れるバックを用意し、楽しみに待っている姿がうかがえた。感染防止、危険防止を考えてコースを決め、医師、看護学生の協力を得て行った。お弁当も栄養室、給食の方々に協力をしていただき、食事の工夫をしてもらったところ、患児に非常に喜ばれ食欲増進につながった。参加できなかった患児にも同じお弁当が配られ、落葉などを拾ってきて飾ることで笑顔がみられた。

特に好評だった行事としては、患児達が楽しみにしている毎年恒例のクリスマスがあげられる。患児、つき添いの母親、看護婦、医師が一緒になって出し物を計画し、実施した。主治医からのクリスマスカードをつけたプレゼントをサンタクロースから患児一人一人に配られ、とても喜ばれた。クリスマスを機として、素直になったK君(12才、横紋筋肉腫)がいる。K君は入院してから、疼痛のためか閉鎖的であったが、クリスマスの中から看護婦や医師と気軽に話すようになり、痛みを素直に表現したり冗談なども言うようになった。

## 考 察

プレイタイム、年中行事を行ってみて、入院生活の中での遊びについて目を向けるようになった。患児達の間にも、プレイタイムなどが次第に浸透してきて、土曜の午後になると、「散歩に行こう」「何かしよう」などの声がかかれるようになり、楽しみの1つとなっている。それまで無口で何もしなかった患児が、みんなと一緒に工作をしたり、大声で笑ったりして、みんなとうちとけられるようになり、患児同志の人間関係が良くなった。また、こうした過程の中で年長児は、年少児にいろいろ教えてあげたり、ルールを守れない子に注意をしたりする場面もみられ、入院生活の規律などを互いに学びあっている。看護婦側も患児を見る目が広くなり、白血病という疾患にとらわれぎみとなっていた考えを反省させられた。また、親にも行事に参加してもらうことにより、親子同志の意外な一面を発見でき看護面にも役だっている。

患児の希望を聞き計画の段階より参加してもらうことで、患児自身のもとなり、楽しく興味をもって参加することができた。この事により、患児同志の関係、看護婦との関係がより良いものとなり、精神的不安や緊張の緩和ができ、治療効果をあげることもできた。

しかし、ここで忘れてはいけないことは、参加できない患児である。感染予防の為や、治療上重症の為、個室にいる患児、動くことのできぬ患児に対するの考慮も必要である。今回はこの患児らに対してはあまりふれてないが、普段よりの訪室、ことばかけ、できる範囲内での遊びの工夫、年中行事への参加の働きかけを行っている。

遊びを充実したものとするためには、患児一人一人についての把握が大切である。その子の年齢、性格、発達段階で何をすればいいのか明確にしておくべきである。

治療を第一目的とした病院という限られた環境の中で、患児の持っている健康な部分を最大限に生かし、見守っていくことは小児看護において重要なことである。

## おわりに

今後、入院生活の遊びの中で患児をうまく誘導していくために、保育、心理学などの学習会を開いて、実際の看護に役立てて行きたいと思っている。

## 参考文献

- 1) 吉武香代子：長期入院時の看護の限界 小児看護
- 2) 依田 新, 沢田慶輔：児童心理学 東京大学出版会 1976.
- 3) J. Alex Haller, Jr. 編 子どもの入院 医学書院
- 4) 日本看護学会集録 母性小児分科会 1974年 1975年 日本看護協会出版会

表 I

## 年 中 行 事

行 事	時	場 所	プ ロ グ ラ ム	参 加 人 数
ピクニック	S 54. 10. 27 12°30'~15°	大学構内の芝生 のある場所 大学中央図書館	パネルシアター 手遊び “子供の絵” 展覧会見学	患児 15人 Ns 9人 Dr 4人
クリスマス	S 55. 12. 25 18°~20°	南 3 F ホール	アマチュアグループによる演奏 母親たちの歌 患児たちの歌 Nsの劇 Drのサンタクロース	患児 20人 他病棟の患児15人 Ns 15人 Dr 15人 つきそい 10人
節 分	S 55. 2. 4 18°~19°	小 児 病 棟	お面づくり 豆まき	患児 22人 Ns 10人 Dr 3人 つきそい 12人
ひなまつり	S 55. 3. 8 12°~14°	南 3 F ホール	昼食会 ひな人形作り 手遊び	患児 15人 Ns 6人 Dr 3人 つきそい 8人
子供の日	S 55. 5. 10 14°~15°30'	南 3 F ホール	鯉のぼり作り 歌 ゲーム パネルシアター 紙しばい	患児 17人 Ns 5人 付添 10人 学生 10人